

はじめに

平素より本校の教育活動を温かく支えてくださっている関係者の方々に、心より感謝申し上げます。本校の令和7年度(2025年度)における研究の足跡を「研究紀要」として一冊にまとめることができました。

本校では「みんなが“いきいき”とした学校にするためには」をテーマに据え、「子どもも大人も、みんながやってみたいことに挑戦できる学校」を目指しました。

そのために教員一人ひとりの日ごろからの課題意識に目を向け、情報共有や課題に向けた話し合いのしやすさなど、自分たちの指導の足元をしっかりと見つめながら各研究に取り組むために、「5グループ・16チーム」での研究活動として取り組んできました。学部やグループの垣根を越えた少人数グループの設定、同じ課題意識を持つチームに所属する仕組みを構築することで、一人の悩みがチームの課題となり、対話を通じ、多角的な視点から支援の手立てが構築されてくること、そして、このフラットな対話の文化こそが、子どもたちへの最適な支援を生み出す源泉になり、同僚性の高まりにもつながっていくものと期待し取り組んできました。この子どもたち一人ひとりの「わかった」「できた」につながる支援を再構成するプロセスは、「学び続ける組織」の姿そのものとなることを期待しています。

そして、子どもたち一人ひとりの教育的ニーズが多様化する特別支援教育において、教職員が一人で課題を抱え込むのではなく、チームで知恵を出し合うことは不可欠なことです。互いの実践を認め合い、フラットに議論できる環境が整うことで、より効果的な課題解決の手立てが生まれるようになります。この「同僚性」の深まり、高まりこそが、本校の教育力を支える基盤になると確信しています。時間の捻出や校内職員体制の不安定さがあることも否めませんが、だからこそ少人数によるチーム制の研究は有効であったと考えます。小さな気づきを掘り下げることは、一人の子どもの背景にある思いや困難さに寄り添うこととなります。子どもたちが「わかった」「できた」と笑顔を見せる瞬間、その裏側にある「教職員としての支援」が正しかったのかを問い直し、常に「子どもの笑顔のために何ができるか」を自分事として捉え直すプロセスを大切にすることができたのではないのでしょうか。

本紀要には、各グループが試行錯誤しながら取り組んできた実践のプロセスが凝縮されています。冒頭に足跡としてまとめたりましたが、単なる記録ではなく、本校が「学び続ける組織」として一歩前進した証にもなるのではと考えます。

今後も、本研究や意識して取り組んできた対話風土を大切にしながら、子どもたちへの温かな眼差しと共に、子どもたちも教職員も「みんなが“いきいき”とした学校」づくりを全校一丸となって進めていきたいと強く思います。

結びに、本研究の推進にあたり、多忙な中にも関わらず熱心に取り組んだ教職員、そして何より私たちに多くの気づきを与えてくれている子どもたちに感謝し、挨拶といたします。

校長 鈴木 英資